書東抄

中

へ 5
1397
2

利
1397
2

去来抄　中

同門評

猶もなほ柳のさいなまるひかな　芭蕉

浪化集ハさいなる柳とかせり色ハ手ゝ誤伝なりかなまて
史邦ゝ小文庫ハ柳のさいなるとなおす支考曰さいなる柳なりいて
汲伝るを去来曰さいなる柳とそいふに支考曰柳のまゝいたし
も柳なる如しと比論せるもなほ去来曰さいなる柳の色に
さいなるなりさはる柳といふて毒樹ハ変元伝る故
かなまて手ゝ誤をなす支考曰吾子の説ハ引るゝ

明治　年　月　日
武寄贈

兵藩る柳と雪一丈竹日　翁の居きい志る趣向を
支考ういるかくなるむ去来曰流石の西士ゝとゝ行ふる
口惜しく比論ゐしてを雖くもいそん歩ゐさい新とは
いうゝ乃ゐつ格信も又音別なりと論ゐ許六曰
先師の短尺ゐさはる柳とありを上柳のさいるゝい首
切なり去来曰ゝ切のすい平ゝ関ゐる異ゝ今論に
おゐゝ先師の文ゐ柳のさいるゝ作ゐあり許六曰先師
あとより歩しく行ゐ自ゐし真跡も證とゝゝとなり
三ゐ皆く陳る柳の説なり後賢形判したまへ
去来曰いるゐ故ゐやありゝん蕉ゝ自ハ汝ゐ波しゝ歩ゐ

人ゐ汝ゐ法すゝいゝゝゐと江府より半俳行ふを後大切の柳一ゐ去来に
ゐゝ歩ゐゝとを支考ゐも結たまふを志ゐとゐゐと續猿蓑集ゐも
除ゐゝゐゝ浪化集撰の半ゐ先師迂化ゐ乃しゝハ此自於
むゐしく跡ん事を恨てを入集ゐをゐゐ世ける

雪於日ハ兎乃皮の袋つゝを　芭蕉

曽町日此句意いゝ去来曰ゐ出ゐるとゐと遊ひてと
ゐゝゐゐゐとも乃業と思ゐるへし強て理會すへゝ志
機発を踏破しを知しし先師ハ句を結行ふに平
甚愛新す先師曰是を悦ん者越人と汝のゝゐ
らむと思ひしにゝてを志りとて強ゝの桟蝶

なりし世人或云雪ハ越後党の像ヨ似タリ或云党の
皮の紫色ハ雪中の意ヲ表シタルナラントいろく理屈を
つけてゐるけれども扨いろく所のとく解さハ暑ヲ日に
接ハ寒ヲ紫ヲ色やしなりの影なるべしいと深百し

山路来て何やらゆかしすみれ草　芭蕉

湖春曰菫ハ山ヨリ来ル芭蕉俳諧ヨ巧なりといへども歌学
なきの過なり去来曰山路ヨすみれを詠ずる謹歌ヲ
湖春ヲ地下の歌道者なりいなて所ハ雅ならんいと
たかしかの如し

笠提て墓をめぐるや初時雨　北枝

先師乃墓ヨ詣て此句也許六曰是ハ脱ヨリ出句ヲ自伝
疑有てやとヲいへん去来曰やハ治定嘆息のやヲ常に
人を訪ふヲ笠ヲ挑て門戸ヲ叩ヲ是ハ思ひの外ヨ
墓我めぐるるるるとい一所ヲ也元禄ヲ八一句我もて
笠ヲ挑て門ヨ這入るやといふ疑なく外人のるなるべし

春乃野ヲたづ一のこや雉子の夢　野明

たしめハ春風や廣野に行てゐ雉子ヲ此声なり去来曰
うてなるてゐをあら合てやうまし廣き野ヲたづ一のこやと
いへんくやまさんん丈竹曰廣の字ハいやし春の野と
あるむヲ去来ヲ服す

馬の耳すかめて梨子の花　支考

去来曰馬の耳をすかめるを梨子の花とせしはなり支考曰伯のくき事うるさん
吾子の如くかしらより一ときにいひさむてを雖き
すなはち論す曲翠曰二子互に云ふる所を易とし
はさる所を雖とす其論ともに然なり志しとも趣作
をいたす一ときにあらはさんかはるべし去来曰翠亦
云れさる故なり凡俳りを我うたるをやしなひ
いまに云さるを学ぶ次第にすみをんたのし終に
はるる所ふなつうて他の猜忌をやすすハ切を
なすす終にあるべしに

白水のなりもをよ蕎麦少　木導

其角曰ぎハいまつある所翁なり去来曰角いうしを又も
とおもるるあや是ホをカもなるべしきハ名ぬ無作也

うぶ毛より月毛の弱の抜明うる　許六

去来曰予此趣向ありき白を育明の花よ乗込とうひて
月毛駒芦毛馬とき翁つまりの文字を入れ口に
たまりを駁馬を雅なるに紅梅錆月毛川原毛なと
おもひめぐらしてそ尾せとりしうき後許六句をんて
ホ方と嘆すこに畠山左衛門佐といへる大名のうとなる

山畠佐左衛門と云へる一字を入れ彦屋の名なり先師曰
句とゝのをすんハ古頭より千轉せよとあり〳〵もさまこ
起さぬにまとつて〳〵鹿の足　杜若
乾鮭と呼ん〳〵りや油ばゝ　雪也
うゐすの呼て入れたなるかさう　仙蓑
去来曰伊賀の連元あさなる風あり是別先師の一躰也
迂化の後まゝ〳〵多〳〵新のこゝの類なり去愚なる
まを及ゝ〳〵支考曰伊賀特匂ハさせるこゝろまもあれと
いやこゝ〳〵伊賀の連元を上手なり
嘗の古よ糸ふてや花乃雪　羊殘

去来曰雪〳〵やといへる風情あり〳〵乗々りといひてを
句まなるまゝ〳〵でやの文字千金なり羊殘ハ実よまれ
若也丈竹曰てやといつるあり上手のこまを画〳〵をえゝ
うゝひす特別をさうさまれ初まるゝ　其角
嘗の山岩ますうゝ初まるゝ　素行
去来曰角ゝ句を暮春の乱嘗也初嘗る別を逆まする曲句
初の字ハ行ゝ句ハ嘗の姿まあれ岩ますゝ所を
まれる怖れて花あゝ〳〵るすゝ或ハ俳玲ふ時又まこゝより
ゝ〳〵こへ〳〵ひそなるとするさ南なり元もれを化ゝ所る元
中情を知つる也去〳〵さる時を珎物奇言る毫をゝ〳〵行く

まを情を考ふる者一角う功者すゝ時ゝとりて過てる
る多〳〵初学の人情ますんいあるべくしん

桐の本ゝ風るかまくぬ蔵寒ゝ　凡兆

芭角曰是先師の樫の本ゝ等類なり　北曰志ゝ
詞つきの作るゝ者にゝ大あかい是去来曰
多能とをいひ〳〵同巣の句なり同巣を以て他せい
平ゝ風の地あも蔵さぬ所なるといふ巣をとりて
滝川の底つりぬく蔵ゝと言出ていきう手柄
なゝさゝと兄より生れ給さゝんい又名なり

駒笑に出逢ふ野を の芒ゝ　野明

去来曰駒笑ふ人の出逢ふ故也是の落るや又出る芒の
風情なや野明曰落のとなり去来曰そゝめりさい字
作しと吾ゝ作俳諧の形上達せんとを思ハさりし故
たゝたとゝき入作るのゝ支考曰句秀拙ハともゝ
野明此場を考ふるゝ不審也と蕉翁平出人成
教るる年あり首て通せ一とせ先師世日とゝり此旅森
ゝ作せゝしより後羅上達せり常ゝ俳友なゝ作り
むなゝ発作ゝも先師をゝめ文性支考なゝ形ゝ
含吟ゝて外のゝる功をゝ行ぬ故行のゝかゝ
句もお来ゝり誠ゝる筋をゝむ一〳〵只平生化言の

弱きを維とす

あ〳〵山猿のつゝつる栗の毬　小丘庵

花咲て二日居ぬ世界うる

正秀日嵐山を少年の句あり　風情あり後生ハ
無功の入〳〵る有て少年の句とひ〳〵去来曰
二日とゝ居ぬといふあり化法の悦よまゝ〳〵ナリ
蓬門の大ム嬢よまなるり

茨城の人あさよけ〳〵ぶ　越人

其角許六ともに云ハ句ハいひおほせさる故ム僧ム別る
とゝといふる茨去あり去来曰蜜栗一体の句とゝて
いひおほせたり俗ムとゝしてれ又ものあり

電のうきまゝせてり関夜うる　去来

文竹支考ともム日下の茨文字過たり田つゝやとゝ
有〳〵去来曰物を重ねうゝたゝ雪夜なり為士曰最
句ム〳〵て拙〳〵と論すき後文竹ム語て曰退て思ふに
為士を電の句とゝ〳〵陶ちん只電の後ハ関扶の句也
故ム行とゝを中侍る文竹曰さいうハえ先さりたいゝ侍ん

ほゝゝ化帆裏ムなるや名まゝ　先放

そゝ〳〵ハ下を明石深といつ波多集ムあ〳〵あおせり
可南曰いうなる故ムや去来曰時ム帆裏ムなるやとゝ

にて景情たゞ是一ツに明石潟をこむるハこゝろ就
称たりけんか可南曰同集に卯七か子規も明石之いへる
かゝり侍るや去来曰卯七か発句ハ趣向を二ツ三ツとりかさねて
作するも能にあらん又下意を移せて作たることを格外なり

とゞ作も名もなかりけん不蓋翁　玄梅

許六曰是を疑経たりと云感せん者こそなかりけり就難也
又曰人あり路上にて人にあひて上へやりへし下へやりへし
と在を写ふかをしてにをはわかれ去来曰上へやりかへし
とふきは上を疑ひて下を決したるゆへ語路不通なり
又疑ひて決したるといふてにをはもあらん此不蓋翁ハよしに

疑ひありて下を定むる作ぞくるしからん又らんまらし
まかよふ之許六曰あちかちふたつまるといへる趣作てあそ
あしなせ

鞍壺に小坊主のるや大根引　芭蕉

風国曰此句いかなる処か面白き去来曰吾子いまだ解し
給はずや只図して志るべしたとへは花を図するに
奇山幽谷霊社古寺禁闕によしあるハもち宮ようかんよき
かゆゑに京ま多し都のごとくの数ハ墨のおしなく
みそあらん称しうさ作えとりえやさん又図となし
てかうちこ就ましかぬも就あらむ是ホハまとより

國のあしぶとを用ゐられを今孫しく情の侘なる
圖あしを畫を畫とをしてもよろむ句となりても
よろんさんを大根引の傍ふ草をむ馬の首うち
さけむ鞠つかふ小坊主のちりつりと楽ふる國
かなくを古うんや拾うむや蒸しに尺(一)
國ら兄伺菜却て國よりも蒸動すうしい俳諧成
志ゝ歩といても畫をするする殺也西師尚景う
子なり

夕ゝを撞をちうゝや寺乃秋風國

此句をしゝを晩撞のさゝゝゝふ句之句ハ志ゝり

風国曰此山寺ふ晩撞をきくに曾てさゝうゝ歩
依て他を去来曰是殺風景也山寺といひ秋のゆ雁
といひ晩撞といひ寂しふるすの頂上なり志ゝ新成
一端游興驕動の内ふ用さゝうゝ侘をふを一己の
私なり風国曰此時此情あるはいうに情をも他を
まゝふや去来曰差情あゝそ物のをくにも他せんと
ゝ物句ふ歩せり句論句撞侘ををいをも句意成
をふうすをあゝ

應くをいをゝ敲くや雪の門　去来

丈艸曰此句不易ゝを法りの句中を行ゝり

支考曰いうあつて新あき節よりハ入るゝや正秀曰たゝ
先師の芳名ハさ敷を恨るのゝ曲翠曰句の吾悪をいとゝ
尚時仏ゝん人を見くゝ仏といつて其角曰去の雪の門也
許六曰玄佳句也いまゝ十分なゝ露川曰五文字妙之
去来曰人ゝの評亦たのくゝ信より出つ此句を
先師近化乃至の句なりきゝ同門の人ゝも雖ゝと
たゝへ見ゝハ自化ともに此場まとゝまゝ

歳年の広袋や神の光る　去来

大宰府奉納の句なり許六曰叢句ハ切字二ツ用るハ
法ありゝ句切字二ツの病あり去来曰予爰て切字二ツあるハ
ゝるなゝ事ゝ句ゝもこゝしを切字ハ用ゝ

広瀬や戸板たきゆ乾山乃中　助童

去来曰句初学の工業なゝ句体風姿あり結語滞ゝ
情稚ゝなく事あゝゝ最南時流乃たゝ
中也世上の句おほくハ見すゝ故ハ角こゝあゝ化と句中
ハあゝあひ或ハ因ハをいふとをすんゝ切の外ハとゝ
ゝ燕脂箱の下ゝ名ゝるすゝなり此見ハ下地ありて
よゝ師ハ学ゝいゝゝの低者ハう至ゝむ才一いまゝん
中ハ理屈なゝ故なりもゝ通功のおゝゝるまおゝんてハ
又いゝゝの意ゝいひるもなりもん怖るゝ

さゝ〳〵さや屋うゝ見くる春の歌　木導

許六日此句ハ入庵のあとゝ見おくる萩の上風といふる句歌之

去来日吹送るの歌を鶯庵ハ山を帰る雲色といふ

こゝを春一体のさゝ〳〵さゝ〳〵いつる趣意各別なり句新

なるべし

唐黍まうけろふ彩や昊まつる　洒堂

洒堂日路通いつるハ唐黍を累ね稈ゝ〳〵幾句と

なゝ〳〵〳〵也去来日路通いまゝ句ハ花実を兼

さ侍故也ハ句を衍乃黍ハ火新のもれる物う亀祭を

賦〳〵る也一句の実らにあり手黍黍ハ庵黍とも累稈とも

手場ハ時〳〵る物を用〳〵〳〵亀ハ一句の花之実ハ亀祭ゝて動

〳〵〳〵動けて外の句也花ハいとも有〳〵手円社なるを撰用の

霊祭〳〵ぬさ社父恋〳〵　井泉

去来日吾子ハ出生〳〵ゝ父を喪〳〵ふや井泉いとく

ゝ〳〵〳〵送葬〳〵侍る去来日無仏〳〵〳〵化人の句也

吾子ハ對〳〵ゝ〳〵〳〵〳〵幾句を吟ゝるに意ハ

聖賢佛神の境ゝも遊ふ無〳〵〳〵妻を禁裏仙洞の

〳〵ハさもゝ〳〵〳〵乞食素門の上ゝも打ふ〳〵〳〵句に

わ〳〵ハ外ハ外ハを出〳〵〳〵〳〵身外を吟せハあ〳〵ゝ

害を求ゝ侍〳〵ん

伊勢神宮やあるまぢまぢ彩色五　尼　許六

去来曰七字彩いとくさんハいゝ是を出さハ一句きとり
おもゝん許六曰志をりハ自然の事こ求て他すゝるこれ是ハ
七字を以て發句となる也其角もさすがと評し侍る

門口や牛王めくりて初しくれ　化志ふ幻

去来曰此句表根より見せしこれに其角ら翁法師の
門れの句と名乳と評す予こ誤なり志ハ少し
似ゝるすもけハくしく嫌ひ除て一句の趣体を志ハ
門とひれとふまてをやを名乳の評をなせりいとはるし

猪の鼻ぐすつうす西瓜　卯七

去来曰ぢぢるするしこ三四分の句なり正秀曰猪なれそ
ゝて鼻をぐすつうしくんと志恢のうり志後先師も
一興ありとなり去来曰退て思ふに此ハいまる上方ハ
西瓜めつゝしくそ西瓜秀もさわるふゝより猪のあや
しゝゝるとゝ風情史都せり予ハ西國くまれるて西瓜も
瓜茄子のとくさをめつゝとも杉もんさりゝ仮を為てゝろ
ゆうさりゝり恵て人の句をまくにおゝ志る場しを志ゝ
さる場とにたゝひ有一一点の嘲を変て逃れゝる
人の汗となのしゝりといつる彩也

慢改て人を見るよやまさゝ　其角

許六曰是を謎といふ句也去来曰是いなとなしても せよいひ
かけせざる句也たとへく提灯て人を見るといふ心を
出す提灯もてたるもよせこれをまんちゝをとゝせんかとて
人をたゝるものをといふをもひとり合点していふるも此也
むゝ一句といふ物ありそれを句形切り様或ハてるを
そのあやをもてまく句也此句をもて影をもあ〻為
あさゝほに幕ちゝ〻〻男ゝ　風毛
曽町曰此句或人の賞奇也いふ去来曰淡句といふいたんのこと
杜年曰先師の蕉を称きめ〻〻ふ男ゝといふなる所を秀物
ありや去来曰先師の句をもて角う蕉〻ふ蛍といふるを他ものて

巧なる句の答也句上ゝなすゝ答る所を趣あり風毛ゝ句ハ
お後裏裏一の見るゝ所なるゝ彩のゝをゝ句ハ口をひゝけハ
出るも此なりゝゝゝに他て見せん伊勢ゝと題をおさしよ
曽町別露の句をも蕉て襟ゝをゝゆゝ本淡ゝ又
菓の頷ゝて菊咲て家根のかさりや山畠と十題十句
言下ゝ賦〻〻ゝ為ゝゝこと句形疑もあん一類ゝ十句
せんとゝゝ曽町別砧の題をおす嫁より嫁の吉よゝ
砧ゝ京掛の賦をゝゝ砧ゝとふをゝ〻十句等
とたゝ手ハ蕣門並吟ゝ一の名ありてゝ彩のゝ況や
集るも出る先師の句ゝ仕ゝ各おのゝすありと知る一

去来曰尚時世間の仏者蕉の蕉の句あるを見はるの
木槿なとの句作まゝひあるまゝ句を吐き〳〵芭蕉流
とおもふ人多し旗おかし〳〵事みまゝせんこれを
記すも拙也

年とや赤中の花を星月夜　其角

元日や土つふるゝ鶏もせん　去来

許六曰尚時元日とゝふ冠用ゝまゝ誹あり去来曰
元日ハ海ふつゝ云まあゝ仏やの字を懐みきゝゆ
け難なる〳〵けり句元日といたん外なるやハ嘆美〳〵
ゝる初也許六曰其角ハ句を吟〳〵ゝ考ふ歳旦に

あゝ元日ハいひ古ひゝりと家ゝ先師曰さそうり拙
仏者の句元日といたんハ拙ゝゝて年とやとを
重ゝ〳〵是又やの字ハ嘆賞のやとゝふハなゝ五つ地
やハ疑のやとゝを習ふる去来曰其角ゝ句ハ拙ていハ
先師かくのゝまふ〳〵弔ゝ句に拙いてをさハのゝま
ハ〳〵仏者乃甲乙をもて云まあゝ已くゝ志す
まゝ遠あり弔ハ孫拙彩詞をもて常ハ才二等に
重ゝるそこハ先師も能見ゆ〳〵一是又嘆美の
やハ名目まをなゝ名目を改ていゝ治定のやゝ治定
ゝも嘆息嘆美あり世話ゝもゝゝりや素堂切ゝり

やむさ〜坊なとゝふ皆治定嘆美也と論す杉後賢
列〜注へ
風國曰長根の蔓句一句ゟ季節を二つ入るゝ也あり
疑ふ〜なや去来曰一句ゟ季節ゟ二ゟ共も疑なるへし
もとより好む事ゟもあるべし
許六曰一句ゟ季節を二つ用るゝ初心のなりゝ紀事也
季と〜季のかゝゝまゝあり去来曰一句ゟ季を二つ用るゝ
ハ功者初心ゟよるへ〜べきしと許六の季の通ふまゝに
習ありといふゝ弟ゝいまゝ知さる事也
育より唖乃ゝはゆゝ月見そのゝ　去来

去来曰此句ハ十七八年前の句なりゝ此ハ先師ゟも賞
せ〜れ世上ゟも賞〜あるゝ句也去来彰〜〜〜て
嵐雪〜といふとも句位を論ゝるに至ていゝ甚下品也いま
蕉門の俳友中〜此場ゟゝ此ハ或連歌師の曰
花のもとにて此句の評あり俳諧もかゝる感情の句あれ
あゝつゝ〜〜なり是を賞せ〜所と考ハけいゝ的の
連歌師ハゝ所もし〜〜にたもひ侍る

蓼牛花の蔓を見せゝり風の秋　許六

一説此句先師の葛の葉の面見せゝりと笑ふ所なりと
許六曰等類ゟあ〜べ見せゝりとを初のむもひまて也

類向かひ合ひて去来曰等類といひつゝ同景の句なる
たゝ和哥なき花さゝぬ常盤の山の雪いたのれ降てや
雪と紛ふんとに雪を見せぬ常盤の山の小男鹿いたのれ
なきてや秋と思ふ〳〵むとよみても雪敷るまちの作とよ
俳諧なき事を思ふべき事也

志ぐれや紅葉の小袖を吹うら返し　去来

正秀曰いとんによるも秋もなくなりたの数まて去来一生の
句屑也去来曰正秀ゝ評いまゝ解しなを予ハ左
志ぐれもて来る嵐の路上まるの小袖吹うら返
けしきや紅葉ふかるす山おろしの風と詠ふる
うへの俳諧なるべしとゝ化しなるまてなり

生朝のひちくすするを春のせ
ちのぬりこにTと志ぐ

去来曰此附句墨のせといふる所いのこの祝儀と極て
此分るゝやうりひちくとうてうりなるあ
まほ〳〵志〳〵と次の附句まてもよろむかふ雪より
句体宜くなるなり趣て一句に所をしるハあとく
付るゝも好なり

梅の花赤いさくあらいこのか　惟然

去来曰惟然坊ら今の風大ふ色ホの数なり蕉句ハ
あ〳〵先師迂化の歳の冬惟然坊ら誹諧を導ふ
きはゝる口質のまよりすめて孫源ようしくと
浪しちて或ハ枝の末ようすゝくと風の吹ワりなら
いふを炭〳〵弱ふ又俳諧を氣緣(サキ)みて言分別ハ他す
〳〵とのふまひ亦ハ後いよく風体ハろうんなとゝ
まひゝる事を図まよひ亦ハ切ようみて身の集の
哥仙ハ作る事よふ紙子あるハてくの雪ハ句なとに
先師評〳〵作へる句勢句姿なといふとの拙ゝたハ
みなく忘却せゝ閑と見えゝり

行〳〵て見五湖烹蛎の音を多　素堂

なき人の小袖もいまや土用かゝ　芭蕉

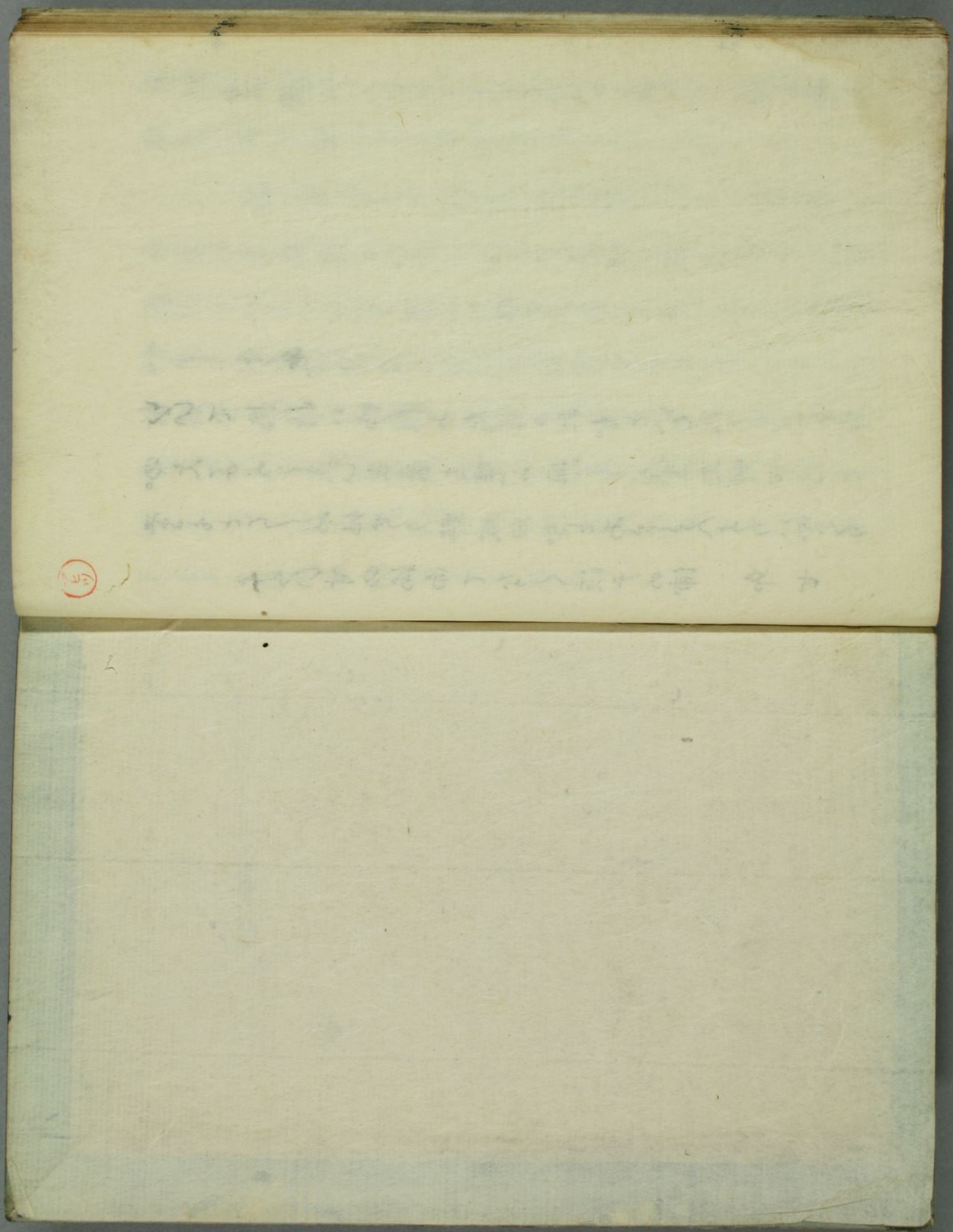
素堂子の句ハ深川芭蕉庵ハたゝ作ふ句なり先師の
句を弔ハ妹ハ身まゝりゝる作英法の国より帰ふ句なり
ともにそゝ残いとなのむたゝ中ハ本ハ是ハ作ある集を
尺るふ先師の事とも出ちゝ〳〵るゝゝと素堂子の
句をあけいり物のたゝ中ハ来ること我をて名人達人と答言
ら作ゝりそれをもて名人といたゝ事ゝら閑先師の
句もかくのこと〳〵皆人の知ゝるゝ也ゝしのこちゝ〳〵
世話ハも人事いたゝめ志ろたけといい一足一氣の変通

自然の妙應かるすもあるもなしと言る一一就ま痴人
面前爰を説一〇〇すとなり

梅白し昨日ふや鶯を盗まし　芭蕉

去来曰言葉集ま句をあげて先師の事をなるは句
屋〇〇一りといつて是ハ拙のそろを無一作して評せり
秋風ハ洛陽の富家ま出して市中を去山家ま閑居して
詩歌をたのしこ騒人を愛すと関するは逆ら是
変にかれを風騒の隠逸人と打もひ給へる文作ありしう
いくありとむ去後拙けとも行給ハ作ちやは評成
又るふ〇れ〇伝論なるとを知れ足

そひすの海向てなく須ケの浦　弁七

常もとちめ仏せり野坡曰ものあくんよりハやそり
の文字ようむ去来も是ま同一なる丈艸曰のと
いひて風情ハ作ちとたりにものといなんるまるば
一一とも也

中終